

学校評価に対する対応策

(1) 中間的な評価を実施し見直しを行ったこと

ア 体制・制度の変更に関わるもの

- ・来年度からの50分6限授業に向けて、学則や内規の改正を行った。
- ・来年度から1年生の芸術が音楽・美術の選択になるので、今年度から2時間連続授業で時間割を組んだ。余裕を持って授業を展開することができたが、長欠への対応は課題である。
- ・来年度からの観点別評価の準備として、各教科で試験的に様々な取り組みをした。
- ・主権者教育を選挙に関するものから成人年齢18歳に変えた。生徒はより身近に感じて受け止めていたようだった。

イ 感染対策

- ・始業式等の式典をリモートで実施した。
- ・感染対策や熱中症対策を徹底させた上で行事を実施した。体育祭では競技内容を工夫し、テントを増設した。マラソン大会は規模を縮小して3年ぶりに実施したが問題なく終了した。
- ・密を避けるために水泳は選択制にして実施した。各自が興味関心に応じた運動を行うことができた。
- ・感染対策としてアクリル板を設置したが、特に相談室と保健室に設置できたのは良かった。
- ・被服室も調理室もマイクを使用した。生徒への指示が通やすく飛沫防止にもなった。

ウ 外部講師の活用

- ・キャリア形成支援事業において、商業科3年「社会生活に役立つ法律知識」の講師を東京法律公務員専門学校の先生に変更したところ、生徒・職員とも高評価であった。
- ・経済産業省の方にRESASの活用についてリモートで講義していただいた。
- ・足利市役所の方に足利の魅力や現状について講話していただくなど、地元の理解に努めた。
- ・3年の就職ガイダンスについて、内容を考え業者を変更して実施。細やかな面接指導が好評であった。
- ・探究の時間で哲学対話を実施するにあたり、NPO法人に依頼して教員対象のファシリテーションの研修会を実施した。

エ 「総合的な探究の時間」について

・探究の時間に1・2年が交流する「探究WEEK」を実施した。特に1年にとっては研究のスタートを早め、よりよいテーマ設定や進路意識の高揚に資するものであった。

オ ICT の活用

・タブレット、Teams、Qubena 等、各教科で ICT を使用した授業や課題提出を実施した。

カ 校則見直しについて

・ルールメイキング委員会を立ち上げ、生徒主体で校則の見直しの議論を進めた。現段階では一部の生徒の活動にとどまっているため、全校生徒に広げていくことが課題である。

(2) 評価結果に基づく今後の改善方策等

ア 生徒指導の方針について

生徒指導のやり方については保護者の理解が得られるよう情報発信と直接の説明等に努めながら、ルールメイキング委員会を活用し、校則そのものの改定も生徒とともに現実に照らして進めていく。また、日常の生徒指導に関しては、公平性を保つためにもルールを明確にし、教員間で解釈の齟齬が生じないようにする。

イ 家庭学習について

1年のうちから早め早めにタイミングを考えて必要な進路情報を提供し、卒業後の進路について考えさせる機会を多く設ける。学習が進路実現と大きく関わることであるという自覚を常に持つよう促す。また、宿題の内容も工夫する。

ウ 読書習慣について

読書はなぜ必要か、どのようなメリットがあるのかなど、根源的なことから考える時間を設けるなど、教員側からいろいろな機会に働きかけることで、読書に対する意識を高めていく。

エ 教員間の連携・協力体制について

これが十分に機能しないとすれば、それは時間的・精神的なゆとりのなさが元凶である。新規の事業を立ち上げる時には単純に負担が増えるだけにならないように、労働対効果・費用対効果を考えて、やらない選択もするべきである。どうしてもやらなければならないときは、他の業務を統廃合することを前提にするなど、何らかのルールを設ける必要がある。